

ご注意：訳は、要約したものであり、意識の部分もございますので、引用なさる方は、出典を明らかにした上で、英語の原文をご参照ください。シタシーンの中から、ハイライト（最初）の記事を訳してあります。

Echos Come Back))) 2 - 9 ページ

シマホンセイインコが戻る

By Jason Malham

木々の頂上で、羽がばたばたいう音が聞こえると、シマホンセイインコが塗れた葉の中で、水浴びをしているのだということがわかる。最初は、一羽か二羽しか見えないが、目が慣れてくると同時に、20羽近くの鳥を見ることができる。

最近まで、このような光景は夢の中でだけであったのだ。

みんなが“キャンプ”と呼ぶのは、Plaine Lievre で、森の中の開けた場所にある。モーリシャス ワイルドライフ ファンデーションによって管理されているフィールドステーションであり、ここでは、シマホンセイインコが絶滅から救われる活動がなされた最初の場所でもある。キャンプは、今でも、Echo（シマホンセイインコ）活動の拠点であり、シマホンセイインコプログラムのサクセスストーリーの一部である。

今年、シマホンセイインコが、絶滅寸前（Critically Endangered）から、絶滅（Endangered）種に格下げされたのは、すばらしいニュースである。今まで、世界でもっとも希少なオウム種が、しかも、10年以内に格下げされたことはなかった。現在は、330羽いると推計されるこの数字は、我々が以前持っていた期待すら超えたものである。もちろんこれは、一夜にして起こったのではなく、多くの人が、何年も、一生懸命活動してきた結果である。

成功したものの、シマホンセイインコは、いまだに絶滅種であることには変わりがない。実際、300羽というのは、それ程多いというわけではない。最近、シマホンセイの中に現れてきた Psittacine Beak and Feather Disease (PBFD) という抵抗力に対するウイルスの病気は、Echo の個体数回復の、最大の複雑な要因になっている。この病気は、特に 2004/2005 年のシーズンから、広まってきているのがはっきりとわかるようになった。放たれた鳥の中の 5, 6 羽に、ウイルスによる症状が明らかに見られたのだ。

Echo プログラムにおいて、スクリーニング（識別）が、現在、一番重要なものとなっている。80%か、それ以上の鳥たちに、印をつけている。これによって、長期にわたって PBFD の様子を観察してきた。

今シーズンの重要な仕事は、ホンセイインコ（the Ring-necked Parakeet）の個体群にある PBFD の広がり状態を知るためにテストすることである。50羽以上を調べるつもりだ。現在のところでは、このウイルスが、シマホンセイインコ達にどのような影響を長期的に与えるかわかっていない。補助的に、餌を餌場でやることは、個体群の観察をするのに役立っている。個体群の中の半数以上は、この餌場に来る。

Echo の個体群に現れた PBFD は、非常に悪いニュースに思えるが、いい知らせもある。鳥たちの中には、羽が黄色くなった後、換羽の後に PBFD から回復する者がいるのである。これらの多くの鳥たちは、抗体を持っているようである。従って、明らかに感染した個体でも、このウイルスから立ち直るものがあるのである。

私自身は、ニュージーランドで、カカポのプロジェクトに携わった後、2001年に、この Echo チームに参加することとなった。私が参加した時には、すでに、ねずみの駆除対策、補助的な餌やり、などがすでに行われていたので、いい時期であった。最初の巣箱はすでに、Echo に使われていたし、穴の大きさや形の改良も行われていた。

2004/05年のシーズン以降、集中的な、繁殖管理を少し緩和することができた。なぜなら、十分な数の繁殖固体がおり、ひなも順調に巣立っていたからである。2005/06年のシーズンからは、集中的なものから、最低限の繁殖管理へと移っていった。最低限の繁殖管理は、繁殖場を守り、巣箱を供給し、補助的な餌を与えるにとどまった。弱っているヒナを巣から助け出したり、人工的に餌をやったりはしない。

長い間行われてきた生息地の破壊によって、モリーシャスのネイティブの森は、1.27%しか残っていない。残っている森でさえ、過去の森林管理や、外来種の植物のせいで、森の質は低下している。質の劣るこの森は、二つの点で、Echoに影響を与えている。実のなる木が減り、ヒナを育てる時期に、年によっては十分な餌がない。木が生育するのに時間がかかるため、古い木がなくなるということは、巣に適した木が足りないことになる。

木に登るのがうまいねずみ (*Ship Rats Rattus rattus*) や、サル (*Crab-eating Macaques Macaca fascicularis*) に、巣を襲われることは、Echoに多大な影響を与える。九官鳥の一種である *Indian Mynahs (Acridotheres tristis)* は、Echoの卵やヒナを食べ、巣をのつとる。外来種であるホンセイインコが、モリーシャスで増え(3万羽以上ともいわれている)、Echoと巣穴を取り合いし、餌の取り合いをしている可能性もある。ホンセイインコが、Pbfdの原因であると思われ、現在、Echoの個体群に増えているウイルスと、ホンセイインコの多さとの因果関係を調査している。

1980年後半には、プロジェクトリーダーであるカール ジョーズのような人にとっては、早急に行動をとらなければ、この種は絶滅してしまうことは明らかだった。Echoの回復、保護活動は、1970年代に *the Forestry Service & International Council for Bird Preservation* によって、始められ、その後、1978年に *Mauritian Wildlife Foundation (MWF)* と *Mauritius Conservation Unit* によって、活動がより活発になった。プログラムが始まった段階では、なぜこの種の個体群がこのように減り、なぜ繁殖がうまくいっていないのかを学ぶことに集中した。1990年の半ばからは、人工的に繁殖させる管理方法が用いられることになった。

最初のころ、巣箱はうまくいかなかった。2000/2001年に、ガブリエラという名の鳥が、最初に巣箱を使った。彼女は、以前、野生に返された最初の鳥でもあった。翌年、4つの卵を産んだ。このころの巣箱は、大変大きく、雨が漏ったりもした。その後、2-3年の間に、新しいタイプの巣箱を開発し、軽く、コンパクトで、防水、そして、サルに襲われず、Echoにとって大変魅力のあるものとなった。最高20個の新しい巣箱が、2001/2002の各年に設置された。

成長した鳥たちが、繁殖期に達するため、繁殖する鳥たちの数は増えていった。2001/02シーズンでは、16羽のメスが、40個の卵を産み、21羽のヒナが巣立った。この時期には、人工的に繁殖したものうち18羽を野生に返している。2006/07年へと早送りさせていただくと、このシーズンには、前述したように、レスキューや、人工飼育は行われなかった。57羽のメスによって、60回の繁殖が試みられ(3羽は、最初のヒナを失うと、もう一度挑戦した)、160個の卵が生まれ、72羽のヒナが巣立った！巣箱の使用と共に、繁殖の増加が見られる。2006/07シーズンには、65個の巣箱が設置され、41個が使われた。

まだ、人工飼育を集中的にしていた頃には、いい思い出がたくさんある。すべてを書ききることは出来ないが、その中から少し紹介したいと思う。

Zoeは、我々が特に好きなEchoの一羽だ。彼女は、人工的に育てられ、野性に放たれた。餌台から20mくらいしか離れていないところにつけてある巣箱に住む住人である。餌場に関しては、かなり頑固者である。“彼女の”餌場を使おうとする者を、退治しようとする。しかしながら、彼女は、人に対しては、従属的で、おとなしい。

ある日、私は、まだ産まれて2、3日しか経っていない彼女のヒナの体重を量っていた。卵やヒナに触る時は、メスが、オスから餌をもらうために巣から離れている時を狙うのである。

2-3メートルしか離れていない場所で、Zoeが、オスのCassidyから餌をもらっている間に、私は、巣箱の前に、ハーネスでぶら下がっていた。Echoのヒナ達は、普通、なかなか騒がしいもので、最初のヒナの体重を量っていたら、Zoeはそれを聞きつけた。

Zoe は、興味津々で、枝から枝へと飛び、私の肩に止まった。「こりゃあ、耳を噛まれるぞ」と思った。しかし、私が、Zoe のヒナ達の健康診断をしている間、私の肩にとまったままで、静かな、猫が鳴くような声で鳴きながら、ヒナを見下ろしていた。私に対して、何の攻撃性も示さず、これは、いい思い出となった。

ある巣箱を見ると、2羽のヒナが死んでおり、メスが抱卵をあきらめて、冷たくなった卵があった。外来種のかたつむり (African Land Snail) が、巣に入り込み、ねばねばした液で、ヒナを窒息死させたのである。卵は、もう駄目だとは思ったけれど、とりあえず、飼育所に持って帰ることにした。卵を温かくする入れ物にいれ、ジープに持っていった。巣箱から一番近いメインロードで、二人の係員と合流した。その中の一人、アナが、卵は少し温かくなっているようだと言った。その後、卵は孵り始めたのだ！飼育所に戻るための1時間の間に、飼育係のライアンの驚きと共に、その卵が孵っていくのを見ていた。このような試練にもかかわらず、卵は無事に孵った。それから4年後、この卵は Brimstone と名づけられたメスへと成長し、今年で2回目の繁殖活動を経験した。

シマホンセイに使われたテクニックは、その他の絶滅危惧種のオウムたちに用いることが出来るであろう。したがって、Echo プロジェクトで以前働いた者たちが、カカボ、アオコンゴウインコ、コスミレコンゴウインコ、そして、その他のカリビアンに生息する絶滅危惧種のアマゾン類のために、過去に働いたり、現在も働いても驚きではないのである。相談をしあったり、自由に情報交換を行うことによって、プロジェクト間で、新たなテクニックを開発したり、よりよいものにするのは、より容易になる。

キャプション

Just over a decade ago the Echo Parakeet was considered the Rarest Parrot in the world. It was a moment of great excitement to see a single Echo fly over this same clearing.

10年ほど前までは、シマホンセイは、世界で一番数の少ないオウムと考えられていた。一羽の Echo がここを飛ぶのを見るだけでひどく興奮したものだ。

“Achilles,” an Echo Parakeet with severe PBF.

アキリスという名の Echo。PBF に罹っている。

Both symbolic and stunning, these eight Echo Parakeets represent what may have been the total world population of the species less than 20 years ago. In the beautiful early morning light, they are now a small part of a thriving flock of over 300, thanks to the success of the Echo Parakeet Programme.

象徴的でもあり、驚くべきことでもあるのだが、これらの8羽のシマホンセイは、20年程前までは、世界のすべてに生息する数だったのである。

Re hydration for a rescued malnourished chick was sometimes required.

レスキューされた、栄養不足のヒナは、水の補給も必要になる。

Supplemental feeding sometimes results in large healthy clutches that would not have survived in the past. Still, this rare nest with four chicks was an unexpected treat.

補充的に（親鳥に、フィーダーで）餌を与えることによって、その餌の助けがなければ育たなかったようなヒナが健康に育つことがある。それにしても、4羽も育ったこの巣箱は、珍しいケースだ。